

チャレンジできる環境で、 新しいブランドを立ち上げてみたい。

岡田 尊典

織布工場企画次長 / 企画開発、デザイン、データプログラム、生産管理

大学は理系専攻で開発、実験・研究をしていた岡田さん。「企画かデザイン関係の仕事をしたかったのですが、クロキなら両方の仕事をする事ができると思い入社しました。井原のように有名な産地は、自分で作ったものを発信しやすい環境にあるというメリットを感じています。」

各工程を理解していないと企画できないため、最初の1、2年は現場を一通り回り、仕事を覚えてから企画部門に配属。現在は、企画開発からデータプログラム、生産管理といった幅広い業務を担当しています。「自分が履きたくなる商品、履き心地の良さを想像し、経糸の種類、太さ、密度を考えて生地企画します。一つの企画に1週間程度かかりますが、海外の展示会シーズンなど多い時には月に5、6点を企画しています。」

経験を積むうちに、「触ったことのない生地でも、完成までの工程がイメージできるようになった」という岡田さん。そこまで成長できたのは、「若い人に任せてみようという社内の雰囲気のおかげ」と言います。「自分でデザインしたいと思い、専用ソフトを購入してもらいました。それまでデザインは外注していましたが、私の方が良いものを作れるという自信がありました。」結果、今では自社でデザインを行い、売り上げも増えたそうです。

着実に経験や実績を積んでいる岡田さんですが、やはりベテランの職人には教わる事が多いそう。「機械の調整も担当しているのですが、ベテランの方に調整の不明点を聞きながら進めています。30年以上のベテラン職人は何事にも詳しく、本当に尊敬しています。」いつかは、新しいブランドを立ち上げてみたいという岡田さん。開発中の生地もあるようで、今後の活躍が楽しみです。



もっと生の声

Q & A

―― 大変だったことはありますか？

革新織機でも旧型織機のような風合いを出せるように工夫したことです。旧型織機がつくる独特の風合いを再現しようとすると、密度が低く、すぐに破けたり組織がずれたりするリスクがありますが、そのギリギリのところで調整し、バランスを考えながら取り組みました。

―― やりがいを感じたときはありますか？

取引先から1mm単位で細かな指定があったときは苦勞しました。生機と加工後では縮み方が違うため、最初は適正な縮率が分らなかったです。生地の密度・縮度など考慮して計算し、調整していきました。苦勞した分、予想以上のオーダーが入ったときには安堵とやりがいを感じました。

―― 嬉しかったことはありますか？

アイビースクエアの生地展示会に家族で行った際、自分がデザインした生地を見て「クロキの生地が一番いい」と言ってもらったときはとても嬉しかったです。来場したお客様にも「いいものを作っている」と反応をいただきました。また、家族にも自分の仕事について理解してもらえて嬉しかったですね。

